2007. 8. 30

おーい図書館

No.122

発行 おーい図書館
代表 青木和子
松戸市牧の原1-104-416
〒
047-311-0886

投稿

戦争を語り継ぐ

伊藤和子

上海で生まれ育った私は、敗戦の年、18才でした。

彼の地は近代史の中でも重要な役割を占める都市だけに、昭和に入ってからも5年毎に地上戦が起こり、その度に一般人達も巻き込まれて逃げ惑いました。

1927年(昭和2年)蔣介石軍のクーデター

1932年(昭和7年)上海事変勃発

1937年(昭和12年)日支事変勃発

そして、1945年(昭和20年)母国の敗戦という苦難に逢い、私共は翌年4月に引揚げてきました。

日支事変の時は5年生でしたので、よく覚えています。

中国大陸は戦乱が多かったので、民衆は敏感。先ず異変を感じると、通達なんぞ来る前に荷物を背負ってサーッといなくなりますから、街全体がガラーンとして白っぽくなります。

在留邦人達は町会毎に集まって、港に近い小学校へ避難して連絡船の来るのを待ちます。その間にも、弾はビューンビューン飛び交いますから、校舎の外へは出られません。

そんな思いを何回かしましたから、今、中越沖地震で避難生活を送っている方達の大変さは、身に沁みて判ります。

上海の場合、何万という邦人を隠密裡に船で運ぶのですから、領事館を始め責任者達にとって、それは命懸けの大仕事だったと思います。

何回か連絡船が往復して、やっと私達一家の番が廻ってきました。

ある暑い真夜中、幌ですっぽり覆われた軍用トラックに、何十家族達がギュウ詰めに押し込まれ、息をひそめて港へ向かいました。

黄浦江に懸かるガーデン・ブリッジを渡りかけた時、両岸のイギリス租界側。共同租界側から、再び撃ち合いが始まり、トラックは橋の上で立ち往生をしてしまいました。何発かの弾は、トラックをかすめました。

その時、団長の声がしました。その声は、今でも忘れられません。

「皆さん！長い間ご一緒に頑張って、ここまで来ました。もう港が眼の前という時、残念ながら、私達の運命は盡きようとしています。ここが最後です。どうぞ覚悟をして下さい！」---と。子供ながら、死を意識したと思います。

併し、どういう訳か一瞬銃声が止み、「それーっ！」とばかり全速力で橋を渡り、港に滑り込んで命拾いをしました。

後年、上海を訪れる度に、ガーデン・ブリッジの袂に立ち、橋を眺めながら、「あの時ここで死んでも不思議ではなかったのに、どうして私は生き残ったのだろう？」と考えてきました。何か運命的なものを感じます。あの橋には！へ御多分に洩れず、老朽化で建て替えられたらしいと、ニュースで言ってました。小学校の校舎も突っかい棒で辛うじて…です。こうやって、上海の思い出の場所は、一つずつ消えています。仕方のない事ですが！）

さて、1938年～1944年始め頃までは物資も豊富で落ち着いた生活でしたが、戦況が悪くなってくると、サイパンや沖縄等の基地から、アメリカ空軍の大編隊が毎晩のように飛んで来ては、日本各地の都市を爆撃していきました。途中、上海上空を通過するので、翌日のニュースを聞くと、昨夜どこがやられたかが判り、重苦しい不安な空気が広がっていきました。

ソ連が参戦した日だったと思いますが、夕方帰宅のため電車に乗りかけたら、突然両側の家々から中国人達が興奮して飛び出し、忽ち大通りが群衆で溢れ、「日本負けたー、日本負けたー、帰れー、帰れー」と口々に叫びながら、電車に向かって投石し始めました。「ピシーッ、ピシーッ」と窓ガラスに当たる音！恐怖の一刻でした。

そして、8月15日！校庭に並ばされ、ラジオで天皇の肉声なるものを初めて聴いたのですが、ガーガーピーピーで、よく判らなかった。でも、日本が負けた！戦争は終わった！という事だけは判りました。

その日から引揚げる迄の間、置かれた立場によって多少の違いはありますが、困難を極めました。母国が戦争に負けた時、敵国に居住していたその国の人達は、一切の保護がなくなり、国から棄てられたのですから。流浪の民となってしまった訳ですから。へ現代のイラクやアフガニスタン、アフリ

力等の難民と同じことです。）

その上、もっと恐いのは、インフレ！国が破滅した時、その国の貨幣価値は0%となり、ものすごいインフレが始まります。第一次世界大戦後のドイツのような超天文学的インフレの中を、よくぞ生き延びた！と考えるとゾッとします。

引揚げは11月から始まり、私共は翌年の4月で、最後の方でした。アメリカ軍の上陸用舟艇の船倉に鰯のカン詰の如く詰め込まれ、息もできないような感じ！（だから今でも魚のカン詰はキライ！）

博多湾に入ったのは2日後でしたが、前便にチフス患者が出たとかで一週間上陸できず、毎日毎日湾の廻りの景色を眺めていました。

「なんという美しい山や川！山紫水明とは、まさにこの景色だなあ！国破れて山河有り、というのは本当だなあ！」と心の底から納得しました。

色々苦労しましたが、引揚げの状況としては上海は良い方でした。港だったから。

奥地から逃がれて来た人達の悲惨さは、想像を絶します。

軍隊は、決して一般人を助けません。

戦争ほど愚かなものはない、と思っています。

私が戦後ずっと平和運動の端っこにつながっているのは、「戦争だけは絶対イヤ！」という、この想いだけです。（2007.8.10記）

投稿

憲法第九条（戦争放棄）を守ろう

森　修

戦争のない国、殺戮の起こり得ない国、人殺しを職業とする人間＝軍人のいない国として、六十年余り続いたこの国を、そのまま次の世代にバトンタッチしませんか。

私が二歳のときに、第二次世界大戦は終結しました。結果は敗戦でした。占領下の統治により、軍国主義国家から一転して平和国家に変えられました。すなわち、新日本国憲法が制定され、第九条に「戦争放棄」が掲げられたのです。

それから六十年余、世界各地で局地的な戦争が起こり、占領国がアメリカ一国となり、アメリカの時代変化の御合で参戦へと傾きかけたこともありましたが、憲法九条のおかげで、非惨な戦争当事国となるのは避けられました。おかげで私は、銃撃戦も無惨に転がる死体を見ることもなく、一生を終えそうです。

しかし最近になり、以前からくすぶっていた九条の改定案が浮上し、連立政権によって、現実味を帯びた段階に入ろうとしています。

国家という社会形態を組織しますと、弱者に対するしわ寄せという耐え難い不合理が沢山ありますが、それは私たちの世代で耐え忍ぶことです。

ところが、戦争は、次第に準備を整えてから起こる場合が多いので、次の世代の者が引き受けるようになります。幼い、参政権のない人間が、幼いながらも戦争はいやだと思っても、彼らは、それを表現し、政治に反映させる権利を持っていないのです。

私は医師で、小児も診ます。乳幼児の汚れのない姿をみていますと、この児らに、戦争のない、私の享受した平和を残しておかねばと考えるようになりました。それが、私たち大人の義務だと考えます。

私たちには、政策を提示して国会で論戦する権利は与えられていません。唯一、国会議員を選ぶ権利しかないのです。

今後の選挙において、平和憲法を変え戦争ができる国にしようと意図する政党・個人に、この一事だけで「ノー（NO）」の意志表示をし、世界に平和国家としての自主自立の道を進むことを宣言し続け、次の世代にもそのバトンを堅持してもらおうではありませんか。

《お知らせとお願い》

◎講演会

「子どもが算数好きになる時」

松井幹夫さん（「さんすうのたんけん（偕成社全8巻）」の著者）のお話。

10月6日(土) P.M. 2:30〜4:30

市民会館202号室、参加費無料。

対象は父母の方・先生など大人の方。ご一緒に「さんすう」を楽しみませんか。

◎会報の合本づくりについて

15周年記念として、私達の活動の記録を形あるものにして残すことで、今後の活動に生かし、図書館を利用する松戸市民や全国の図書館関係者に広く知って頂きたいとの思いから、合本（会報1〜115号）づくりに取り組んでおります。

ご購入とカンパのお願いをさせて頂きます。（一冊2000円）

どうぞよろしくお願い申し上げます。